はじめに

新しい学習指導要領が来年度から完全実施されます。ある解説書を繙くと，変更点の一つとして,『観点別学習状況』における評価の観点について紹介しています。現行の「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」が新要領では「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」になります。どこが変わったのか？相違点を探すのに苦労しますが,「技能」を独立させ，対となっていた「表現」を「思考・判断」に組み込んで「思考・判断・表現」とした点が微妙な変更点で，ここがまさにポイントである，と指摘しています。今回の改訂の一つの目玉である‘活用力’を意識したものでしょうが，いつものことながら，新システム導入に向けて，まずは日本語を読み解く教師の‘活用力’が問われることになります。

言うまでもないことですが，中央の方針がどう変わろうと，どんなにシステムが複雑になろうとも，私たちにできること，やらなければならないことは明確です。民間であれば，‘つくる’‘売る’は時代のニーズに合わせ，刻々と変わらざるをえない戦略が必要でしょうが，人を‘教え’‘育てる’教育，特に義務教育では，本質的に目指すものは変わりようがありません。その一方で，社会はめまぐるしく変革し，価値観が多様化するもとで,‘教育’という不変のテーマを追い求めるわけですから，教師の力量が益々問われる時代になりました。効率化ということばが馴染まず多忙化を極める教育現場においては,子どもたちと接する時間が唯一保証される授業が益々重要になってきています。

そんな中で,“子どもを見る目をもつ教師”という理想像を目指しながら，教科指導や学級経営などにおける今日的な教育課題を絡めた実践研究は，地道な活動ながらも，とても大切で有意義なものです。研究の成果以上に，常に問題意識を持ち，それを分析し，突破口を開こうと努力を積み重ねる行為・行程そのものが，教員自身のスキルアップに繋がるものであると思います。

さて，私たちは現在までに様々な教育課題について率先して教育実践研究を行い，研究会や研究紀要などを通じてその過程・成果を公表してまいりました。そして，今年度より「であう・つながる・うまれる　コミュニケーション」という新しいテーマで研究をスタートしました。今年度は，従来の教科ごとのアプローチから離れて，教科横断型の領域・サブテーマを設定し，これを意識した試みを開始しました。

本紀要はその実践研究の報告書です。是非ともご高覧いただき，内容についてはもとより，私たちがめざす方向性につきましても，忌憚のないご指導並びにご批正を賜りますようよろしくお願い致します。最後になりましたが，それぞれの研究に対しまして，お力添えをいただきました関係の方々に厚くお礼申し上げます。

平成22年10月30日

金沢大学附属小学校
校長　井 原 良 訓